

ベテラン技術者に聴く

雨垂れ石を穿つ（地道に、着実に）

株式会社エイト日本技術開発／東京支社／防災保全部 嘉戸大治



1. はじめに

「雨垂れ石を穿つ」ということわざがあります。「たとえ小さな努力でも根気よく続ければ成功につながる」ということを表現しています。私はエリートではなく、華やかな経歴や実績とは縁遠かったのですが、その分地道に、誠実に仕事にまい進してきたつもりです。

この40年間、私に起きた出来事と、心境の変化の変遷をつづっていきます。なお、私が経験してきた3Kともいえる労働環境は現在では改善され、法令順守の観点からもあり得ない状況であることを申し添えておきます。



写真-2 災害応援当時の筆者（図面に埋もれて）

2. 社会人としてスタートしていきなり・・・

1983年4月、大学卒業後、就職して最初に配属された勤務地は岡山で、道路設計と環境調査を行う部署でした。はじめて「技術者」と呼ばれることがうれしく、社会人としての生活にも慣れていきました。

就職して4カ月後の1983年7月末、鳥根県西部で大規模な豪雨災害が発生しました。鳥根県西部という、人口密度の低さは全国で有数の地域であるにも関わらず、100人以上の死者、行方不明者を出した災害でした。

災害発生後一週間ほどたった頃、災害対応ため鳥根県浜田市に2カ月の出張を命令されました。言い渡されたのは出張の前日で、しかもこの出張は片道切符となり、災害対応から解放されたのは5年後でした。最初の勤務

地であった岡山に戻ることはなかったのです。

派遣先の災害発生地域へ近づくにつれ、車窓からは山肌は頂上から麓まで崩れ、橋は流され、道路は寸断され、壁や電信柱などには浸水の痕跡が残っている様子が見られるようになり、災害規模の大きさに肝が冷える思いでした。家畜の死骸からと思われる臭気と水害で流れてきた土砂が乾燥し、土ぼこりに悩まされました。

災害対応に派遣された職員は入社10年未満の若手が多く、昼間は真夏の炎天下での現地調査、夜には設計図書の作成という体力勝負でした。お互いに残業の多さや深夜の回数を競い、自慢しあうような労働環境でした。

災害対応に従事した数年間は、自分の専門性も定まらず焦りとフラストレーションがたまっていましたが、この災害の経験が私の出発点であり、原点となりました。

3. 下水道技術者として、少し遅めのスタート、そこで・・・

30歳になる直前に勤務地が神戸となり、下水道計画の部署に配置されました。初めて担当したのは、現在は大型放射光施設であるSpring-8が稼働している播磨科学公園都市内の管路の詳細設計であり、これが私の下水道技術者としての少し遅めのスタートです。

当時は下水道普及率が全国平均で40%に届くかどうかの水準でしたので、中大口径の推進工法、シールドなどの仕事も多く受託できていました。地道に経験を積んで、



写真-1 災害の状況（橋台が転倒）



写真-3 阪神大震災時の地下駅舎（大開駅）崩壊の様子
 (出典：朝日新聞1995年1月22日朝刊)

スポンジが水を吸収するように、下水道管路設計に関する知識を吸収していった時期でもあります。

1995年1月17日、阪神大震災に遭遇しました。会社の近隣では、いたる所から煙が上がっており、後日、新聞や雑誌の写真で取り上げられる崩れ落ちた三菱銀行（当時）ビルなどの惨状を目の当たりにしました。

またこの当時、地下構造物は地震の影響が小さく耐震設計の必要性は小さいと考えられており、下水道管路についても耐震設計は行っていませんでした。しかし、この地震では地下鉄路線中柱の損傷や地下駅舎の陥没が発生したのです。発注者からの要請で、当社設計の雨水シールド管きょの中に入り損傷状況を調査したのですが、陥没までは発生していなかったものの、大小無数のひび割れ、目地の開きなどを確認したと記憶しています。

そして、この年の4月に神戸から大阪に転勤となりました。転勤の翌年には管理職となり、数人の部下もできましたが、神戸の震災に対して傍観者のような立場となってしまったことが今でも心残りです。

4. 技術士としてステップアップするはず、だったが・・・

大阪へ異動した30歳代後半から、技術士を目指し始めました。何度かの失敗のあと、目標の30歳代で滑り込み合格することができました。「技術士」となったことで、ステータスも上がり、より高いパフォーマンスができると自分でも期待していました。しかし、現実にはここからの10年間はつらい時期となってしまいました。

2000年前後から、コンサルタント業界も本格的な不景気となります。私の部署でも業績が悪化、人員は削減されていき、以降に発生したトラブル案件が残された人員に集中したのです。

今でもトラウマとなっているトラブル案件があります。開削による面整備という何の変哲もない設計業務で

した。発端は施工時に地下埋設物の調査漏れが発覚したことでしたが、これをきっかけに施工業者から本来現場サイドで対応すべく事象までクレームとして出され、何度も呼び出されました。現場に行くと、現場監督にすごい剣幕で怒鳴られたり、逆に無視されて口もきいてもらえなかったりしました。多少身の危険を感じながらも、工事終了までの1年間、耐えしのぎました。

「初期対応」に、何の考えもなく、ひとりで火中に飛び込んでいったことが、傷口を広げた一因と今では考えています。リスク管理として、感情でぶつかってくる相手にはどうしたらよかったのか、対処方法を組織で考えてから行動すべきあったと反省しています。

5. 「会社統合」とその後・・・

2009年6月、会社統合により（株）エイト日本技術開発が創立されました。私が50歳になる直前でした。

会社統合という出来事が刺激となり、これをきっかけに少しずつ気持ちが安定してきました。違う企業文化で育ってきた技術者が一緒になってうまく組織がまわるのか、心配していましたが、少なくとも私にとってはよい転機となりました。

2015年から下水道分野から離れ、新しくできた、主に橋梁に関するインフラ保全の部門に移りました。経験のない分野でしたが、曲りなりにもひとつの部署を切回すことができていましたので、それなりの立ち振る舞いは出来るようになっていたのかもしれませんが。

2021年に上下水道の分野にもどり東京に異動、現在に至っています。6年間上下水道分野から離れていたため、上下水道に関する近年の動向の変化に戸惑いながらも周りに支えられています。気持ちとしては、この40年で今が一番、と感じています。

6. これまでを振り返って・・・

若い方へのアドバイスをするつもりが、災害の経験談となってしまうました。平安時代に鴨長明が書いた「方丈記」という古典があります。作者自身が経験した災害を記録した「災害文学」とも言われています。

平安時代も今も、災害の恐ろしさは変わらず、犠牲になるのは弱者です。ただ現在は、特にこの数十年、災害に対する都市の強靭さは大きく向上しています。

これらは、多くの技術者たちが長い年月をかけて着実に成し遂げてきたことです。私も微力ながらその一助となれたことを技術者として誇りに思います。

一方で、災害など危機が起こった際に対応する能力をいかに継承するか、まだ課題は残っています。